

就任にあたって

場長 田中 眞

このたびの人事異動で川嶋前場長の後を引継ぎ、富士養鱒場長に就任いたしました。歴代場長や諸先輩方が培ってきた業績を受継ぎ、微力ながらも全力を尽くすつもりでおりますので、よろしくお願いいたします。

以前、平成3年4月から平成8年3月までの5年間、富士養鱒場に勤務した経験があります。オウム真理教が全盛の時期で、平成7年に行われた当場の竣工式と麻原教祖逮捕が同日となったことが印象に残っています。また、その当時は生産部門を抱えており、種卵、種苗の生産をしながら研究に携わり、忙しいながらも充実した毎日でした。試験研究は養殖技術が中心で、バイテク技術を利用した研究が華々しく展開される一方、私は魚病担当として、ニジマスのIHN、ラッシュとギンザケのEIBSの研究に取り組んだことが懐かしく思い返されます。

現在の養鱒業界を見ますと、長年続く魚価の低迷に加え、飼料価格の高騰が経営を圧迫しています。低迷する養鱒業界を盛り上げていくには、養殖業者の皆様はこれまでのようにニジマスをただ生産するだけではなく、皆様が率先して食品加工、流通、販売まで展開する6次産業化を手がける必要が大きくなってきています。また、河川漁業を見ますと遊漁者数が減少し、地域の活性化が望めない状況にあります。

当场としましては、特長あるニジマスのブランド化をはじめとして、ニジマスの持つ病気に対する抵抗性を高める研究や、遊漁者のニーズに応えたアユ種苗の利用研究を進めていくとともに、ニジマスの消費拡大を目指して、新しい消費スタイルの模索や品質管理手法導入に対し支援していきたいと考えています。



しかしながら、本年3月に発生した震災の影響で、本県養鱒業におきましても一時的に釣堀用ニジマスの需要が減少したり、ギンザケの種苗の行き先が不透明になる事態が起きました。今後、養鱒業界を取り巻く情勢がどのように変化していくのか、見極めながら対処していくことが重要と考えられます。本場では業界のこのような変化に対応した研究の実施や、普及活動を通してお役に立てたらと考えております。

最後に、本年3月に発生した東日本大震災で犠牲となられた方々のご冥福をお祈りするとともに、避難生活をされている方々に心からお見舞い申し上げます。



富士養鱒場のマスコット「マスオ君」

平成 22 年サケ科魚類生産及び魚病発生状況調査

昨年の魚病発生状況調査アンケートの結果がまとまりましたので報告します。本調査は県内のサケ科魚類養殖場で発生する魚病被害の実態を把握し、魚病対策指導の基礎資料とすることを目的としています。

方法

県内でサケ科魚類を養殖している経営体にアンケート表を配布し、魚種ごとの生産量と生産額、魚種別及び疾病別の魚病被害量、被害額を調査しました。調査期間は平成 22 年 1～12 月の 1 年間としました。

結果

(1) アンケート回答状況

魚種ごとの回答状況を表 1 に示しました。ニジマスとアマゴ以外は 100%の回答が得られました。経営体数はニジマスで 2 件、アマゴが 3 件、イワナが 2 件それぞれ減少しました。実経営体数は 44 件で、昨年より 2 件減少しました。

表 1 アンケート回答状況

魚種	経営体数 (件)	回収数 (件)	回収率 (%)	21年経営体 数 (件)
ニジマス	22	21	95	24
ギンザケ	3	3	100	3
アマゴ	29	27	93	32
イワナ	8	8	100	10
その他	7	7	100	7

(2) 魚種別生産状況

平成 18～22 年の生産量の推移を表 2、生産金額の推移を表 3、単価の推移を表 4 に示しました。サケ科魚類の生産量は 1,636 トンとニジマスの生産量の減を反映して、21 年に比べ 319t 減少しました。生産金額は 838 百万円で 21 年を 2 億円下回りました。

ア ニジマス

生産量は土砂災害等の影響を受け 1,471 トンと 18 年以降 1,700 トン前後であった生産量を大きく減少しました。生産金額も 21 年と比べ約 1.6 億円の減少となり、単価も 16 円/kg の減少となり 19 年以降の安値傾向が続きました。

イ ギンザケ

大倉川河川工事の終了に伴い休業中の経営体が生産を再開したことから、生産量は 41 トン、生産金額は 44 百万円と共に増加しました。

ウ アマゴ・イワナ

アマゴについては、21 年から生産量は微増、生産金額は減少、イワナについては生産量、生産金額とも減少となりました。

表 2 魚種別・年別生産量(t)

年	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	その他	合計
H18	1,757	66	72	87	17	1,999
H19	1,778	63	37	72	34	1,984
H20	1,623	15	35	92	34	1,799
H21	1,757	21	32	124	22	1,955
H22	1,471	41	35	68	21	1,636

※その他にはヤマメ、サクラマス、オシロコマ、カワマス、ブラウントラウトが含まれる

表 3 魚種別・年別生産金額 (百万円)

年	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	その他	合計
H18	752	47	100	63	19	981
H19	906	50	46	55	28	1,086
H20	806	24	47	70	22	969
H21	849	31	51	93	16	1,039
H22	687	44	45	51	11	838

※その他にはヤマメ、サクラマス、オシロコマ、カワマス、ブラウントラウト

表 4 魚種別・年別単価 (円/kg)

年	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	全体
H18	428	705	1,395	724	485
H19	510	798	1,255	766	547
H20	496	1,655	1,355	760	538
H21	483	1,457	1,592	745	532
H22	467	1,071	1,303	750	512

(3) 魚種別魚病被害状況

平成18～22年の魚病被害量を表5、被害金額を表6、21年と22年の魚種別、疾病別の被害状況を表7に示しました。サケ科魚類全体の被害量は116.5tと21年と比べて5.7t減少したのに対し、被害金額は83,801千円と22,537千円増加しました。生産量に占める被害量の割合は7.1%、生産金額に占める被害金額の割合は10%となりました。

表5 魚病被害量

年	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	合計
H18	143.9	4.5	3.4	5.0	156.7
	8.2	6.8	4.7	5.7	7.9
H19	176.4	2.0	1.4	6.7	186.4
	9.9	3.2	3.7	9.2	9.4
H20	117.7	0.5	3.7	5.7	127.6
	7.3	3.4	10.6	6.2	7.1
H21	119.2	0.0	1.5	1.5	122.2
	6.8	0.0	4.6	1.2	6.3
H22	107.2	4.1	2.3	2.9	116.5
	7.3	9.9	6.7	4.3	7.1

上段：被害量(t)
下段：生産量に占める割合(%)

表6 魚病被害金額

年	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	合計
H18	84,110	7,240	4,600	4,100	100,050
	11.2	15.6	4.6	6.5	10.2
H19	122,135	800	2,167	4,459	129,561
	13.5	1.6	4.7	8.1	11.9
H20	75,659	500	3,906	4,240	84,305
	9.4	2.1	8.3	6.0	8.7
H21	57,803	0	2,051	1,410	61,264
	6.8	0.0	4.0	1.5	5.9
H22	75,211	2,625	2,245	3,720	83,801
	11.0	6.0	5.0	7.3	10.0

上段：被害金額(千円)
下段：生産金額に占める割合(%)

表7 魚種別・疾病別被害状況 (左：被害量(kg)、右：被害金額(千円))

	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	合計
IHN	18,510	0	0	0	18,510
	36,060	0	220	0	36,280
OMVD(ヘルペスウイルス症)	3,000	1,000	0	0	4,000
	0	0	0	0	0
EIBS	0	3,050	0	0	3,050
	0	0	0	0	0
ビブリオ病	4,500	0	0	0	4,500
	5,800	0	0	0	5,800
せつそう病	0	0	1,200	2,600	3,800
	0	0	330	1,200	1,530
冷水病	2,430	0	0	100	2,530
	2,100	0	0	0	2,100
レンサ球菌症	13,700	0	0	0	13,700
	35,000	0	0	0	35,000
細菌性鰓病	12,100	0	0	200	12,300
	13,120	0	0	0	13,120
白点病	0	0	20	0	20
	2,000	0	0	0	2,000
イナバネ病	4,000	0	0	0	4,000
	3,350	0	0	0	3,350
ミズカビ病	20,000	0	450	0	20,450
	10,000	0	0	0	10,000
不明	29,000	0	650	0	29,650
	11,800	0	900	300	13,000
合計	107,240	4,050	2,320	2,900	116,510
	119,230	0	1,450	1,500	122,180

上段：平成22年
下段：平成21年
太字：魚種毎の最大

ア ニジマス

被害量は107.2t、被害金額は75,211千円となりました。平成21年と比べ、被害量は12t減少したものの、被害金額は17,408千円の増加となりました。疾病別ではIHNの被害量が最も多かったものの昨年と比べ半減しました。しかし、その被害金額は昨年と比べ4,960千円増えており、小型魚の被害が多かったものと推測されました。また、レンサ球菌症の被害が半分以下に減少しましたが、採卵後の親魚におけるミズカビ病の被害が2倍に増加しました。

イ ギンザケ

昨年は大きな被害がありませんでしたが、今年はEIBSによる被害がありました。

ウ アマゴ

被害量は2.3t、被害金額は2,245千円でした。疾病別ではせつそう病の被害が多く、被害量、被害金額とも昨年より大幅に増加しました。

エ イワナ

被害量は2.9t、被害金額は3,720千円でした。疾病別ではせつそう病による被害が中心でした。

(岡田裕史)

	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	合計
IHN	26,115	0	0	0	26,115
	21,155	0	22	0	21,177
OMVD(ヘルペスウイルス症)	2,000	500	0	0	2,500
	0	0	0	0	0
EIBS	0	2,125	0	0	2,125
	0	0	0	0	0
ビブリオ病	6,000	0	0	0	6,000
	2,900	0	0	0	2,900
せつそう病	0	0	1,067	2,500	3,567
	0	0	554	660	1,214
冷水病	6,306	0	0	1,000	7,306
	1,146	0	0	0	1,146
レンサ球菌症	5,520	0	0	0	5,520
	16,120	0	0	0	16,120
細菌性鰓病	6,760	0	0	220	6,980
	6,572	0	0	0	6,572
白点病	0	0	50	0	50
	2,000	0	0	0	2,000
イナバネ病	3,900	0	0	0	3,900
	1,350	0	0	0	1,350
ミズカビ病	4,500	0	228	0	4,728
	1,800	0	0	0	1,800
不明	14,110	0	900	0	15,010
	4,760	0	1,475	750	6,985
合計	75,211	2,625	2,245	3,720	83,801
	57,803	0	2,051	1,410	61,264

上段：平成22年
下段：平成21年
太字：魚種毎の最大

トピックス

宇佐美地区河川魚類調査をお手伝いしました

近年、郷土の里川を守る活動が盛んになっていますが、伊東市宇佐美では「宇佐美流域会議」が主体となって多くの活動が行われています。昨年、当団体の依頼により魚類調査を行い、地元向けの報告会へも参加したため、以下に概要をとりまとめます。

◆魚類調査の実施

平成22年10月7日に、宇佐美地区を流れる烏川、伊東仲川、伊東宮川の3河川の下流部と上流部（伊東仲川の上流部を除く）において、電気麻酔機により魚類の生息状況を調査しました。短い調査区間ではありましたが、カマキリ、ウツセミカジカ、サツキマスなどの希少種や南方種のユゴイなど、魚類9科25種、甲殻類3科5種が確認され（下表）、県内の他地区と比べて多くの種類の生息を確認しました。また、魚類の8割（20種）が通し回遊魚や周縁魚であり、海との繋がりが

により豊かな魚類相が維持されていると考えられました。河川別には、伊東仲川の種類の数が極端に少なく、水質汚濁やコンクリート河床が各種生物の生息を大きく制限していると思われました。

◆一般市民向け報告会への対応

平成22年12月19日に、宇佐美コミュニティセンターで開催された一般市民向けの報告会に講師として参加しました。調査結果から見えてきた問題点の紹介や今後の管理方策の提案など、市民との意見交換を行いました。

◆小学生向けの報告会への対応

平成23年2月10日に宇佐美学園で、同月23日に宇佐美小学校において開催された小学生向けの報告会に、講師として参加しました。両校とも40名ほどの児童が報告会に参加し、魚類を水槽展示するなどして地元の川や生き物への理解を深めました。



種類	種名	生活環	河口下流域			上流域	
			烏川	伊東宮川	伊東仲川	烏川	伊東宮川
魚類	ウナギ	通し回遊	+++	++	+		
	コイ	純淡水	+				
	カワムツ	純淡水	+				
	アブラハヤ	純淡水		+			++
	アユ	通し回遊	+++	++			
	ニジマス	河川残留				+	
	アマゴ	河川残留					+
	サツキマス	通し回遊		+			
	ボラ	周縁	++	+			
	セスジボラ	通し回遊	+				
	コボラ	周縁	++				
	カマキリ	通し回遊	+	+			
	ウツセミカジカ	通し回遊		+			
	コトヒキ	周縁	+++				
	ユゴイ	通し回遊	+++	+			
	ミミズハゼ	周縁		++			
	アゴハゼ	周縁	+				
	スミウキゴリ	通し回遊	++	++			
	マハゼ	周縁	+++	+	+		
	ボウズハゼ	通し回遊	++	+++			++
ゴクラクハゼ	通し回遊	+					
シマヨシノボリ	通し回遊	+	+	+++			
ルリヨシノボリ	通し回遊				++	++	
クロヨシノボリ	通し回遊				+	+	
ヌマチチブ	通し回遊	++	++	+++			
合計(出現種数)			17	14	4	3	5
甲殻類	ヒラテテナガエビ	通し回遊		+			
	ミナミテナガエビ	通し回遊	+				
	スジエビ	通し回遊		+			
	ミソレヌマエビ	通し回遊	++	+			
	モクズガニ	通し回遊	+	+			+
合計(出現種数)			3	4		1	
総計			20	18	4	4	5

+~+++は出現頻度を空欄は出現しなかったことを示す

◆波及効果

今回の調査結果や報告会を受けて、宇佐美流域会議は、生息魚類の写真展の開催や河川行政への働きかけ（魚道の整備の要望）など、より良い里川の復活に向け次なるステップへ進んでいます。このような取り組みが進めば、生息する魚類数も増加し、川で遊ぶ子供たちの姿が見られる日も近いと思います。

(鈴木邦弘)

第 22 回にじます祭が開催されました

平成 23 年 3 月 6 日に富士宮市にある「ぶらっと宮っ」でにじます祭が開催されました。これは、富士宮市を主産地とする本県の養鱒業を一般の方々に広く知ってもらおうとともに、富士宮市の魚として制定されたニジマスをもっと親しむための代表的特産品に育て上げるために毎年開催しているもので、ここ 3 年間は富士宮ますつり大会と同時に開催しています。このイベントには、富士養鱒漁業協同組合が中心となり、富士宮市、富士養鱒場、観光協会、富士宮にじます学会、食品会社など、多くの人たちが参加しました。

今回は、試食・即売に重点をおいて開催しました。富士宮市内の中学生が考案し、鱒の家の矢辺総支配人が改良を加え、株式会社東食品が商品化したニジマスの餃子「餃 THE 鱒」について、考案者の井之頭中学校の生徒さんたちに感謝状を贈るとともに、試食、販売会を行いました。また、にじます学会で販売したにじますコロッケ、にじますさつま揚げには、購入のために長い列ができた。

した。富士養鱒漁協で販売したにじますの塩焼きも売り上げ好調で、完売していました。

富士養鱒場では、ニジマスなどの水槽展示とパネル展示をしました。ニジマスの発眼卵も展示し、多くの方が興味を持って見ていました。ニジマスに関するクイズも行い、多くの方に参加していただきました。

当日は天候にも恵まれ、非常に多くの方に参加していただきました。これらの活動を通じてニジマスにもっと親しみをもってもらえたらと思います。(鈴木基生)



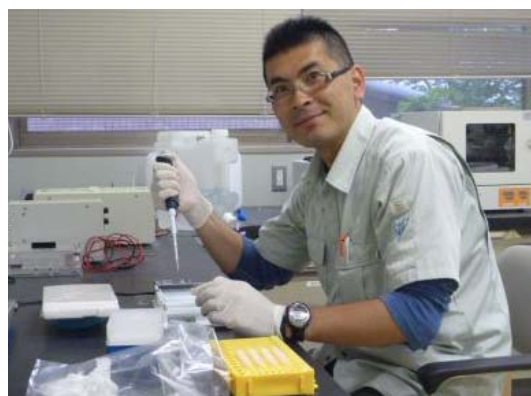
人事異動

(転出)	場 長	川嶋尚正	→	水産技術研究所研究統括監
	主 査	鈴木基生	→	経済産業部研究調整課主査
	主 任	岡田裕史	→	経済産業部水産振興課主任
(転入)	場 長	田中 眞	←	経済産業部水産振興課課長代理
	主 査	松山 創	←	水産技術研究所浜名湖分場主査
	研究員	鈴木勇己	←	新規採用

転入者自己紹介

このたびの異動により、水産技術研究所浜名湖分場より富士養鱒場へ配属されました“松山創”と申します。当场での勤務は初めてとなります。普及指導員として養鱒業、海面養殖業を中心に活動していきたいと思っておりますので養殖業者の皆さんと接する機会も多くあるかと思っております。

業界や地域の振興に微力ながら努力していく所存であります。至らぬ点多々あるかと思っておりますが、よろしく御指導お願いします。



この4月に新規採用職員として富士養鱒場に配属となりました“鈴木勇己”です。

私は子供の頃から海や川で遊ぶことが好きで、将来は静岡県の水産業に携わる仕事がしたいと考えていました。この度、その夢が叶い喜びを感じると共に、静岡県の水産業を担う者としての責任も感じております。富士養鱒場ではアユの資源生態研究を担当することになりました。現場と力を合わせ研究に励みたいと思います。よろしくお願いいたします。



富士養鱒場の降水量と湧水量

月	降水量(降水日数) : mm (日)		湧水量 : 万 t /日	
	23年	過去平均*	23年	過去平均*
1	0(0)	75(6)	4.14	3.66
2	137(10)	80(6)	3.00	2.92
3	86(9)	204(9)	2.68	3.14

* 前年以前の20年間平均値

日誌

1月	2月	3月
11日 知財セミナー(市内)	8日 海面飼育ドナ試食会(沼津)	6日 太田川漁協研修会(森)
12日 アユ需給調整会議(沼津)	9日 実用化技術開発報告会(東京)	6日 にじます祭り(市内)
17日 ニジマス餃子発表会(市内)	10日 宇佐美河川報告会(伊東)	8日 知財事業委員会(市内)
19日 全国養鱒協運営委員会(東京)	16~17日 アユ資源研究部会(東京)	9日 研究評価部会(焼津)
24日 にじます祭り実行委員会(市内)	23日 宇佐美河川報告会(伊東)	10日 虹の里生産協議会
26日 知財セミナー(市内)		11日 P研究追跡調査報告会(静岡)
<視察見学対応>	<視察見学対応>	11日 普及課題成果報告会(焼津)
11日 富士根南小学校(189名)	8日 貴船小学校(116名)	14日 魚病対策技術部会(静岡)
20日 大富小学校(177名)	24日 大宮小学校(85名)	16日 河津川アユ遡上調査(河津)
28日 県東部商工会議所		17日 普及課題設定協議会(焼津)
		22日 湖沼河川研究会引継ぎ(場内)
		25日 第3回ニジマスタウンミーティング(市内)
		29日 海面飼育ドナ試食会(沼津)